

調査研究「『書くこと』を中心にした言語活動」

—中学校・高校国語科における学力向上のための授業改善—

実践編 基礎① 「視写」

長崎県教育センター 高校教育研修課

1. 視写とは

速く書くことについての手だてをとらない状態では、生徒の書くスピードには驚くほど個人差がある。「書くこと」を中心にした言語活動を進めていくためには、生徒の「筆速」をそろえる必要がある。

青木幹勇氏も『第三の書く』の中で、「『書き慣れ』と『筆速』をもたせることは、『第三の書く』を展開していく基本的な条件です。」として、その「慣れ」と「筆速」を身に付けさせるための指導法として「視写」を挙げている。視写のメリットとして、

- 1 文章に書きなれ、速く書き写せるようになります。
- 2 文字やことばの使い方、記号、改行など表記に関する基礎を確かにすることができます。
- 3 文章を視写することが、音読や黙読ではとどかない文章理解の道を開いてくれることは、多くの読書人の語るどころです。
- 4 さらに、視写による、表記についての慣れ、文章の理解、その理解に触発をうけて、表現への意欲をもつこともできるということです。

と、4点を挙げている。

「視写」は継続的に行うことによって効果が高まる。具体的には、指導と評価の計画をしっかりと立てて授業の始めの10分程度を用いた帯単元の形で、できれば年間を通して継続すること等が考えられる。

具体的な実践例を2点示す。

2. 実践例Ⅰ：決まった字数の文章の視写

青木氏の『第三の書く』で紹介されている視写の方法は、時間を決め、その時間内に何文字書き写せたかを計測するというものである。しかし、その方法だと、時間がくれば、文章の途中であっても書くことをやめなければならない。

そこで、決まった字数の文章を視写し、その所要時間を計ることを提案したい。

例えば、以下の文章を書き写して、その所要時間を計測する。

息を一回吸って吐く間に心臓は何回打つか知っているだろうか。答えは四回である。この方程式はどの哺乳類にも当てはまるらしい。では、一生の間に心臓は何回打つか知っているだろうか。答えは約二〇億回である。驚くことに、これもどの哺乳類にも当てはまるのだそう。このことは、本川達雄氏の『ゾウの時間ネズミの時間』（中公新書刊）に詳しい。

初めてこの本を読んだとき、新鮮な驚きを禁じ得なかった。どの哺乳類も、約五億回の呼吸をし、約二〇億回の鼓動を終えて死んでゆく。人間も、犬も、コアラも、鯨も、このような所でつなっていたのである。そして、それぞれの動物はそれぞれの時計を体内に持って、それぞれの「生」を生きている。

これは高等学校1年生に対して1年間を通して行った帯单元「視写『海風』」のために書いた300字ちょうどの文章である。週3回、授業の初めの10分間を使って行った。本の紹介も兼ねている。図1の構想のもとに実践した。

4月の段階で、高校1年生が300字の文章を視写するのに、速い生徒で5分弱、遅い生徒は8分程度であった。概して女子は丁寧に書く傾向が強いため、速く書くことに抵抗感を持つ場合が少なくない。字を多少くずしてでも、速く正確に書くことを指導する必要がある。例えば、話を聞きながらメモを取る場面、あるいは、大学の講義を聴きながらノートを取る場面では、丁寧さよりも、速く正確に書く力が必要である。1年間継続することで、ほとんどの生徒が6分以内の早さで書けるようになった。

視写している様子を見てみると、読解力の高い生徒は、ある程度のまとまりを記憶して視写していくが、読解力の低い生徒は、極端な場合は1文字ずつ見ながら視写していく。1年間続けていくと、次第にまとまりで書けるようになっていく。視写は筆速を上げるだけでなく、読解力を高めることにも効果がある。

教師が毎回文章を書くことの負担は小さくない。

既にあるものの中で視写にふさわしい教材として、大岡信氏の「折々のうた」を挙げたい。一つの文章がおよそ200字前後でそろっており、時間を計測するのに都合がよい。分量があまり負担にならず、しかも、詩歌の鑑賞文として非常によくまとまっている。

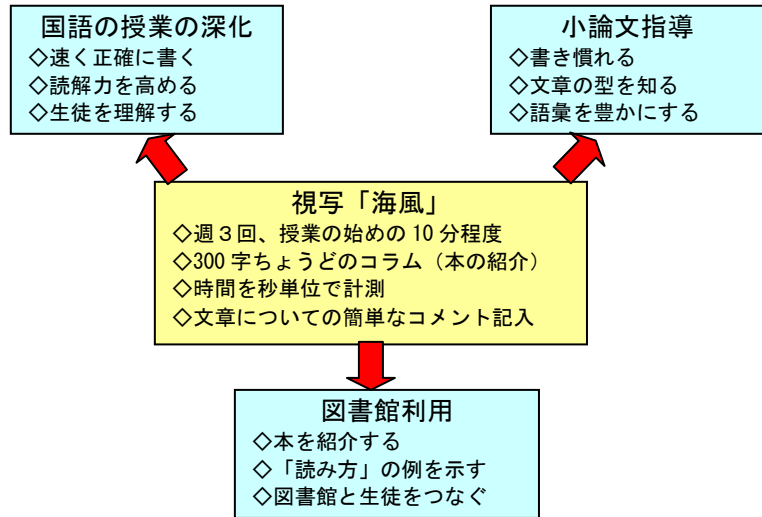
3. 実践例Ⅱ：詩の視写

足立悦男氏は『新しい詩教育の理論』（明治図書）の中で、「詩そのものが教えてくれる位相への信頼」として、詩の視写の可能性を示している。そのような「詩が教える」実践として、足立郁夫氏の「『私の詩文集』作り」を紹介している。

- 1年間の国語の授業の最初の5分間を継続的にあてる
- 各時間に1連を視写させる
- いわゆる「詩の授業」は一切行わない

図1

視写「海風」の構想



実践としては非常にシンプルである。教師が選んだ詩を、1時間に1連ずつ板書し、生徒がそれをノートに書き写す。その活動を1年間継続するということである。ただそれだけの活動であるにもかかわらず、どの生徒も例外なく詩の視写に興味を持ち続けた。そして、教師自身も、詩の選定が楽しくてたまらなかったということである。

4. 視写の可能性

青木氏が視写のメリットとして上げた「書き慣れ」「言語活動に関する基礎の獲得」「文章理解」「表現への意欲の喚起」以外にも、まだ多くの付加的なメリットがある。単に基礎力を身に付けることを目的とした活動ではなく、例えば、読書指導に生かすことや、詩の指導に生かすことなどを加味した単元を組むことで、厚みを持たせることができる。

生徒の実態に応じ、様々な「視写」の形が生まれることを期待したい。